

農林水産政策研究所だより

Primaff News

VOL.7 平成20年2月26日発行



OECD-FAO農業見通し2007-2016の概要



スローフードに関するセミナーを開催しました。



— 前庭に咲きほこるさざんか —

OECD-FAO農業見通し2007-2016の概要

農林水産政策研究所上席主任研究官 上林 篤幸

OECDがFAOと共同で発表した「OECD-FAO農業見通し2007-2016」は、原油などのエネルギー価格の上昇への対応や地球温暖化の防止、余剰農産物の活用等の観点から各国が推進するバイオ燃料政策と農産物需給の関係の分析に力点が置かれています。

その中の特に穀物(小麦および粗粒穀物)に焦点をあてて概要を紹介します。

①世界全体の穀物需給の見通し

小麦、粗粒穀物(トウモロコシ、大麦、ソルガム等の合計)の世界全体の生産量、消費量および貿易量は、見通し期間(2007-2016年度)中は着実な増加が見込まれます。

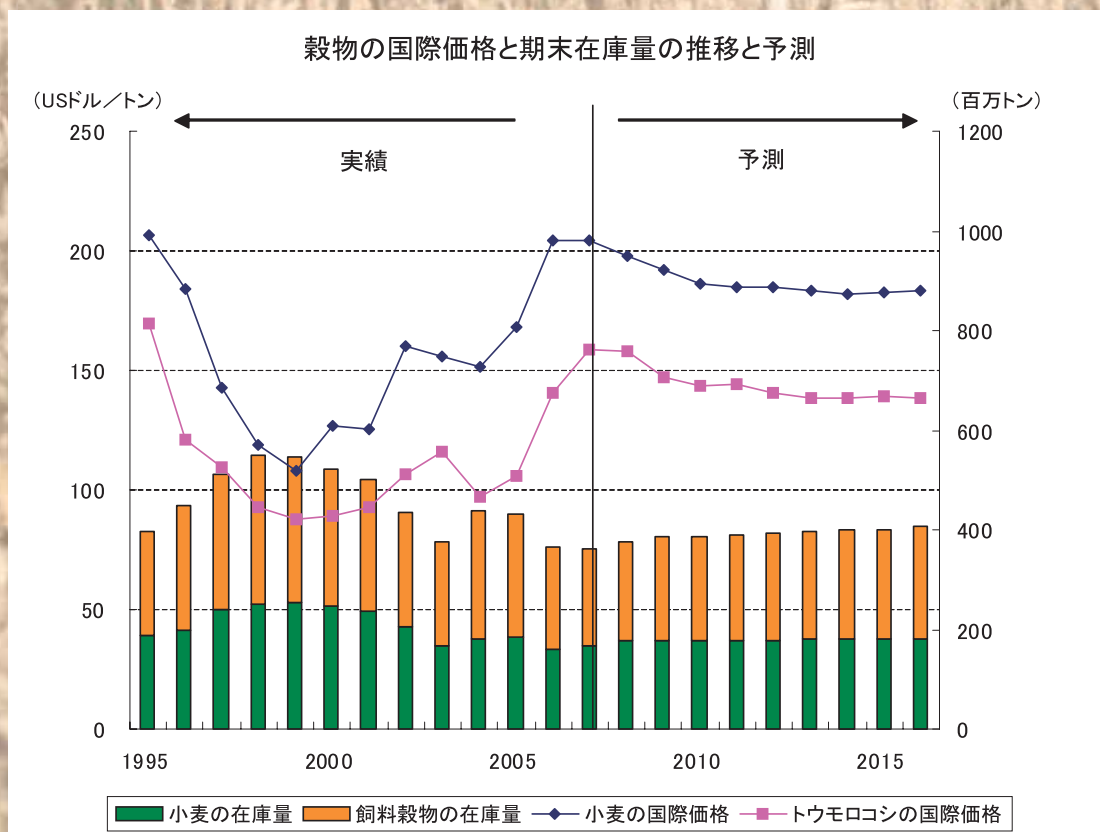
需要面では、中国、ブラジル、ロシア、インドなどで、着実に力強い経済成長が続き、主に畜産物の需要が増加することに伴う飼料穀物の需要が増加するとみられます。

また、予測期間前半5年間(2007-2011年度)において、米国を中心にバイオ燃料原料用のトウモロコシの需要が急速に増加すると見込まれます。

生産面では、栽培面積の増加は僅かに留まる一方、単収の増加により生産量の増加が継続するとみられます。

在庫面では、オーストラリアの干ばつ等の影響により、2006年度の小麦と飼料穀物の期末在庫量は最も低い水準に落ち込んでいますが、今後は徐々に回復に向かうと見込まれます。

これらの結果、穀物の国際価格は、2007年度をピークとして低下が予測されるものの、今後10年間、過去の水準に比較して高止まりするとみられます。

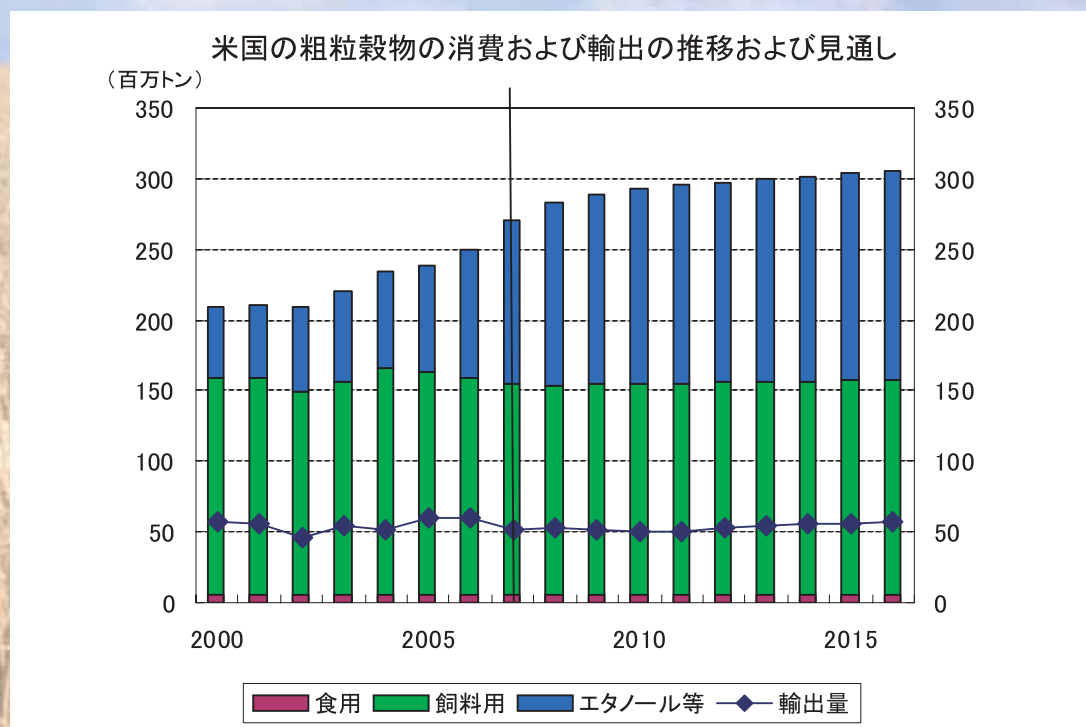


② バイオ燃料用需要の増加

予測期間中前半5年間の穀物需要の最大の牽引車はバイオ燃料です。特に米国、EU、カナダにおいて、バイオ燃料用途の穀物の需要は過去にない急速な速度で増加すると見込まれます。

米国では、2006年度から2016年度の間にバイオ燃料原料として使用されるトウモロコシの消費量は倍増し、2016年度にはトウモロコシ生産量の約3分の1を占めるようになるとみられます。

ただし、生産性の向上に伴う生産量の増加も見込まれるため、アメリカのトウモロコシの輸出量は現状の年間6000万トン程度で推移するとみられます。



③ まとめ

本年の見通しでは、前年に比較して、農産物の国際価格の予測が大幅に上方修正されました。

OECD-FAOは、2006-7年度の穀物の国際価格の高騰は、バイオ燃料原料用需要の増大よりも、主要輸出国における天候不順等の影響による生産量および期末在庫量の減少などの一時的要因がより大きな役割を果たしていると分析しています。

しかし、長期的視点で見た場合、バイオ燃料用需要の増加が価格を高止まりさせる要因になると述べています。

最後に、この見通しでは、今後10年間世界で平年作が続くことを前提にしていますが、近年、地球温暖化等により、世界で極端な異常気象(干ばつ、豪雨、台風等)が頻発していることを踏まえると、農産物の大部分を輸入に依存する我が国としては、引き続き世界の穀物の需給を注視していく必要があります。

上林 篤幸(うえばやしあつゆき)

【研究分野】

部分均衡モデルによる世界の農産物の需給予測及び主要国の政策変更の定量分析等

【執筆論文】

「牛肉の国際貿易の構造変化とその影響－AGLINKモデルを利用したシナリオ分析－」
(2005)『農林水産政策研究』No.9 他

スローフードに関するセミナーを開催しました。

— 「スローフードの理念と活動」について —

当研究所では、19年12月20日に霞ヶ関分室において、スローフード協会の石田雅芳氏によるセミナーを開催しました。

スローフード運動は、1986年に北イタリアで始まった食に関する「アルチ・ゴーラ」運動を起源とする活動で、その後パリの国際大会で正式に国際運動としてスタートしました。現在は世界中に8万人の会員、800余のコンヴィヴィウム（支部）を持つまでに成長し、現在も各地で会員が増えています。スローフードの発想は「食べ物の味を守る」ことが「人々の喜びを守る」ことであると認識するところから始まっています。

同協会の具体的な活動には次のようなものがあります。



— セミナー会場の様子 —

「味の箱舟(アルカ)計画」

少数の小規模生産者によって生産され、その生産量が限られ近い将来絶滅する可能性がある希少な食材や食品をみつけ、その生産や消費を守る活動です。ここで食品を単なる「モノ」として捉えるのではなく、文化、歴史、芸術の中のカテゴリでみるのが重要となります。食を守るために、生物多様性を守り文化を継承しながら教育することにも着目しています。

「チーズ祭り」

スローフードには「消費者は生産者ともっと語り合うべき」という問題意識から、多くの国際見本市を企画しています。「チーズ」はその一つで、スローフード協会の本部があるピエモンテ州ブラ市に世界各地から180の生産者が見本市に出展し、試食・PRを行っています。なお、EUの安全性基準の遵守することが求められていますが、この過剰な衛生基準によって地域特産の優れたチーズ生産が維持できなくなるという問題がおきていて歴史ある食文化が国際的な基準によって根絶やしになることも危惧されます。

この他に、スローフード協会の主催するヨーロッパ最大の国際食見本市である「サローネ・デル・グスト」や母なる大地の意味を持つ「テッラ・マードレ」などがあります。

編集後記

今月号の表紙は、当研究所の前庭に咲いているさざんかです。この撮影の時はとてもよい天気だったのですが、その後、東京で大雪が降りました。まだまだ寒い季節が続きますが、みなさん風邪などひかれませんよう、気をつけて下さい。

Primaff News

— 農林水産政策研究だより —

VOL. 7 平成20年2月26日発行

農林水産省農林水産政策研究所

企画広報室広報資料課

TEL : 03-3910-3809

※バックナンバーはHPをご覧ください。

<http://www.primaff.affrc.go.jp/seika/primaffnews/news.html>

